

施設果菜類の有機栽培実証を行っています

平成24年度から施設野菜の有機栽培実証をトマト・キュウリで行った結果、良質苗の確保、土壌病害対策、天敵利用での課題を見出し、それらへの対策を試験しています。

施設野菜では、果菜類を中心とした有機栽培体系を組み立てるため、トマト・キュウリで試作を行いました。

各品目の育苗は慣行栽培の育苗と同時に行いましたが、有機栽培苗は、播種後2週間頃から慣行栽培苗に比べて生育が遅れ、葉色も淡いように思われました。

夏作トマトでは、結実用のホルモン処理が不要な大玉トマト‘ルネッサンス’とミニトマト‘ネネ’を用いて栽培をしました。‘ルネッサンス’は定植後1ヶ月頃から青枯病が発生し約半数の株を抜き取りました。一方、‘ネネ’では青枯病の発生は見られず、慣行栽培よりも収量は多くなりました。

夏作のキュウリでは、定植直後からアブラムシ類やタバココナジラミの発生が見られ、有機栽培で使用可能な薬剤防除を行いました。増殖を抑えられず収量は慣行栽培より低くなりました。また、収穫終了後にネコブセンチュウの発生が確認されました。

以上から、①初期生育のよい苗をつくる、②ネコブセンチュウ及び青枯病等の土壌病害虫対策の実施、③天敵の活用といった課題が考えられました。

今後は、初期生育のよい育苗培土の検討や、土壌還元消毒及び接ぎ木苗の活用並びにビニールマルチとリビングマルチ（※1）の比較等を行いながら、よりよい栽培体系の提案を目指し取り組んでまいります。（写真1, 2）

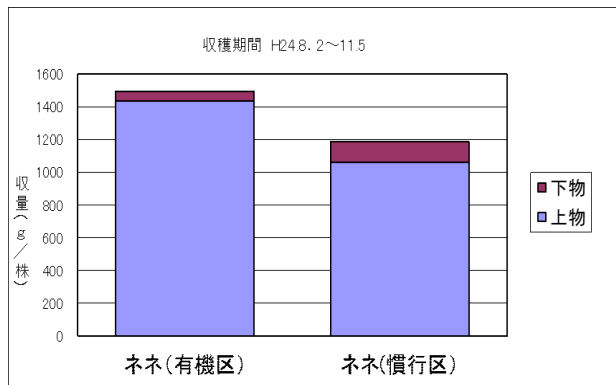


図1 ミニトマトの収量比較

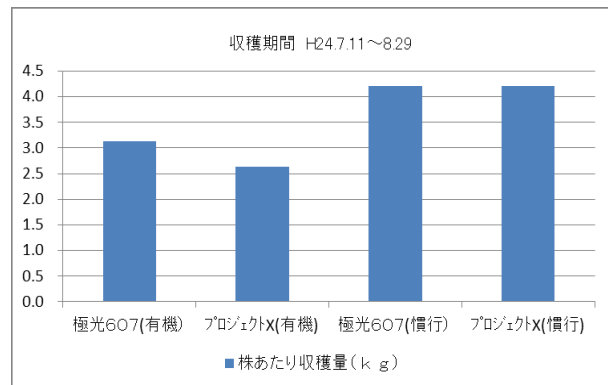


図2 キュウリの品種ごとの収量比較



写真1 トマトのビニールマルチ栽培 (H25)



写真2 トマトのリビングマルチ栽培 (H25)

※1リビングマルチ：栽培作物とは別の作物をは種して栽培期間中地表を覆わせること
(実用日本語表現辞典より)

問い合わせ先: 栽培研究部 野菜科(担当: 奥野かおり、石津文人)

TEL 0853-23-6991
E_mail: nougi@pref.shimane.lg.jp